

旅 と 探 検

織田 晃 敏

元来、人間は旅を好む。旅とは、個人でも集団でも自分の生活環境を離れて他の場所、他の国の生活に入り込むことである。その際、自身の環境を離れる必要性を本能的に感じ旅に出る場合と、必要に迫られて受動的に旅に出る場合とがある。いずれにせよ、「旅」の持つ普遍性に変わりはない。それは、他の土地に行くことによって、新鮮な驚き、喜び、悲しみ等の様々な感動が心の中に広がることであり、また自分の生活環境の文化、習慣、生活様式、考え方、感じ方等が旅を通して、客観的に見えてくることである。そして、この普遍性を味わうためには、旅に出て単に気分が良かったとか、楽しいとかいうだけでなく、旅する側に常に、「なぜか」と考える問題意識がなければならない。しかも、固定観念にとらわれず、自分で勉強したり考えたりして、教養や感性を研ぎすましていかなければならない。要するに「見る」目を持たないでどんな素晴らしい所へ行っても、それは単に「行った」というだけにすぎない。逆に、「見る」目を持っている者にとっては、毎日の通勤でさえ楽しい旅になり得るのだ。

ところで、探検という言葉に魅せられ、内なる激しい情熱に駆られ、常に未知なるものを求め続けている我々も、また旅人なのではないだろうか。それも、日本という恵まれた国に住む、かなり豊かな旅人ではないかと思う。その我々が探検活動を行う上で必要なことは、旅する側として常にマクロ的な観点から事を進める、ということである。そうすることにより初めて、すべての人や自然の

産物と対等に接することができるのである。

昔から、旅する側とされる側は、ある意味で対等であった。旅する者は相手の生活を邪魔することなしにひっそりと入り込み、そこから様々な事を学びとった。受け入れる者は旅人を通して外界からの情報を得ることによって、自分達の生活に刺激を与えてきた。

さて、現在我々はいつでも旅人になれる。それ故、現実を直視し、自分の置かれている立場、行動が、社会にどのようなインパクトを与えるかを正しく認識する必要がある。特に最近の傾向として、主観的な探検活動（しかも少数で）が増えている中で、他の旅人よりもはるかに密に相手と接する機会が多い我々は、もっと自分自身を客観的に見つめ、現実の問題に目を向けなければならない。関大探検部においても、平均年一回のペースで海外探検活動を行っているが、活動を行う上で、もっと旅人として考えなければならない問題があるように思う。探検を行う際の社会的、経済的条件が容易になればなるほど、旅人としての、「見る」目を持つべきではないか。そして、常に旅人の姿勢で世界の現実を見つめつつ探検活動を行っていくならば、国際化の進む現在、探検のもつ社会的意義はますます重要性をおびてくるのではないだろうか、我々は探検家である前に旅人なのだから……。

(25代)